

『格闘去勢少女2』



仲間をやられた不良が
女相手に金的無し試合なら勝てると踏んで
戦いを挑むも、
反則負け上等で
女たちに金的を狙わまくって
ボロクソにされる話

玉子王子 著

一章 迷惑不良に大柄少女が金ちゃん蹴りと短小鑑賞

放課後。

制服姿の大柄な美少女が廊下を歩く。

同じ制服ながら、頭一つ二つ小さい少女たちが話しながら前から歩いてくる。

眼鏡で、気の弱そうなものたち。文学愛好会という名前で、BL同人誌を作っている者たち。あまり重んじられないオタク系の人間というわけだ。

多くの者が彼女らを避けることなく、自分たちのせいでぶつかりそうになってもオタク少女らが悪いかのように睨む者も多い。

しかし大柄な美少女は、ぶつかりそうになると、巨体からは想像がつかない軽やかな動きで避ける。特に何も言わない。

制服の男子が前から歩いてくる。

不良っぽく、周りの迷惑を顧みず、手足を振り回し、大声で話しながら歩いてくる。

今話している内容は、中学生相手にカツアゲをしたという「武勇伝」だった。

不良の中でも最下層の者たちといえるだろう。

周囲の男女が我先に避ける。

避けそこなった小柄な少女にぶつかる。突き飛ばされ、倒れる少女。

不良たちは目を見張り、慌てて手を差し伸べる。

そして、少女がそれを握ろうとすると手を引き上げ、せせら笑って歩き出す。

皆、関わり合いになろうとしない。

一人、大柄な美少女だけは不良たちを避けない。

お互い歩く線上にいても、相手がいなかったかのように歩き続ける。

周りのほうがむしろ息をのみ、見つめる。

その中で最後までお互い避けず、ぶつかる。

美少女の脛が、不良の太ももの間に。

「はぐっ！」

グニュ、と軽く急所を押し潰される。

へこっ、と超高速で腰を引く不良。回避ということではない、当たってからの反応だ。男の本能による悪あがきである。

もちろん間に合わない。

当たってからのだから間に合うわけがない。

ぎゅ、と肉袋が縮み上がり、汗を噴出させる不良。

別の場所なら眉をしかめる程度の軽い衝撃だが、股間だけは別だ。

「ほおおお」

「うわ！ 大丈夫か!？」

「おい、あいつ玉……」

「なんてこった……」

「え、何？」

「ぶつかって痛がってるみたいだけど……」

「え、当たり屋ってこと？ うわ、やっぱりあいつらクソだわ」

「ポンって当たっただけだよ。因縁つける気だ。ひどいわ」

周囲の男女。

性別で完全に反応が分かれる。男子たちは自分に同じことが起きたかのように真っ青になり、女子たちはなんだかわからない顔だ。誤解して眉をしかめるものもいる。



周囲の男女。

性別で完全に反応が分かれる。男子たちは自分に同じことが起きたかのように真っ青になり、女子たちはなんだかわからない顔だ。誤解して眉をしかめるものもいる。これはもう、生まれつき「金的」を警戒せざるを得ないものと、一生しないでもいい者の差だろう。

これはもう、生まれつき「金的」を警戒せざるを得ないものと、一生しないでもいい者の差だろう。

何が起きたかわからない女子たちの中で、一人だけ気づいている者がいる。

ぶつかった本人だ。

「おっとごめんよ」

ニヤ、と笑う美少女。見下ろす。

不良たちも男子の平均よりは背が高いが、美少女はそれ以上だ。

股間を抑え、悶える男を見下ろす。

「お、お前……おおおお、んほおおおお」

「あははは、どうした？ 痛そうじゃないか？ 大の男が……ん？ おいおい、まさか……あはは、おいおい、どこにぶつかったんだよ」

カア、と顔を赤らめる腰を引いていた男子。

「い、いや……」

「まさか、タマタマ？ 大事なところに？」

「いや、そんな……」

大柄な美少女が首をかしげる。

「そうか、なんかその辺押さえてる感じだからな」

——あはは、なんで隠すんだろうね？ 玉打った男って。女の前で「キャン玉がああああ！」ってのは恥ずかしいのかな。気にすんなよ、**そんなぶっ細工なもんぶら下げてる時点で恥ずかしい**んだから。っていうか通行妨げながら歩いているほうが恥ずかしいだろ実際のところ。だから玉蹴られるんだよ。

わざと脛の辺りを軽くぶつけた。

ぶつけられたもの以外の不良たちが顔を真っ赤にする。

——こいつ、なに笑ってんだ！ 俺らにわざとぶつかるわけねえから事故なのはわかるが……わざとじゃないから笑っていいってことになるわけねえだろ！

「ぶつかっというて笑ってんじゃねえよ！」

一人が食って掛かろうとする。が、別の不良が急に顔色を変える。

何か思いだした。

慌てて、肩を引く。

「おい、やめろ！ こいつ森宮だ」

「げっ！ も、森宮ってあの……吊り下げ……あっ」

いきがっていた不良らしい男。名前を聞いて真っ青で振り返る。

と、前に立つ森宮に襟首を掴まれる。

そして、吊り上げられる。

片手で、それも左手で。

足がつかなくなり、ばたつかせる。首が閉まらないように必死で森宮の手にしがみつく不良。

「あうううっ！」

「お、おい放せ！」

「いや、気になったんだけど……あんた結構顔綺麗だな」

「え、何を……あっ」

急な話に面食らう周りの不良たち。吊り下げられたものはそれどころではない。

その股間に、空いた手を押し付ける森宮。

「かわいい顔だから、女じゃないか？ 確かめさせろよ」

「ちょおおおお！」

ぎゅむ、と大柄だが、柔らかい手が男の肉塊を掴む。

もぞもぞと肉の塊を探る美少女の指、肉玉の位置を把握し、手のひらのほうに押しつけてギュッと握りこむ。

「や、やめろ！」

周りの不良が距離を取りながら叫ぶ。

「あは、何を？」

「し、知ってるんだぞ……森宮、お前がこうやって男を吊り上げて……キ〇タマを握り潰すのを得意としてるってこと！」

「別に握り潰す展開じゃないだろ？ こんな肉団子、潰そうが潰すまいがどうでもいいんだし。ナノメカ入りの薬で一〇秒で治るってことぐらい知ってるだろ」

ナノテクノロジーが発達したこの時代、薬一つでどんな怪我でも治る。そんな薬がコンビニでいくらでも買えるのだった。

その事實は、ある種の女性たちに辜丸に対する攻撃への躊躇を著しく軽減する意味を持っていた。

玉が潰れたら治らず、生殖能力が失われるなら、玉を持たない女性とはいえそこへの攻撃は躊躇する。持たないからこそ、どのぐらいの加減が必要なのかわからず、余計なめられるということもあった。

しかしあっさり治るなら？

ただ、同害報復を食らわず、一方的に攻撃できる都合がいい急所というだけではないか。

ぎゅうううう、と不良の肉玉を握り潰す森宮。

「あああああああやめええええ！」

「おい放してやれ！ 潰れる、潰れる！」

「潰れないよ、大げさだね男って。キ〇タマの事となると。あたしはキ〇タマぐらい一瞬で握り潰す握力があるんだよ。潰れてないってことは、潰す気がないってことさ。なんなら、1・2・3、って数えて、3で大事な大事な、お友達の金のタマタマ、潰してやろうか？ ブチっと」



「ぎょおおおおお！」

「やだあああああ！」

グリグリと、握るといふよりむしろ玉の紐の付け根、副睾丸に指をゴリゴリと減り込ませる森宮。

玉自体よりむしろそちらのほうが痛いことをよく理解していた。本当に嫌になるほど玉責めに慣れた処女である。

「そらそら、副睾丸潰しー、女のあたしにゃ一生わからない人体最大の苦痛の一つだよ」

「うぎいいいいい」

「やめでえええええ」

「そらそら、手を挙げちまえよ。あげれば助かるんだぞ？ 二人ともこのまま片金潰しを我慢できるつもりか？ っていうか、仲間が我慢してくれるかな？ してくれないと、二個とも潰されんだぞ。それで仲間は助かる。ひどくないか？ まあ治るんだから我慢しちゃう？ さっすが男の子！」

「確かに男らしいねえ！」

「友達のためなら、キ〇タマなんかいらんよね！」

「潰せって言っちゃえよ！」

「ん、おお、あいつ手挙げそう」

見え空いたカマかけに、ビク、と震える二人の不良。慌てて、手を振り上げる。

泣きわめきつつ、二人同時にあげる。

「裏切り者おおおお！」

「お前だけ助かる気かああああ！」

どっと笑いまくる女子たち。

「ぎゃはははは！ 受けるわ！」

「挙げちゃった、終了！」

「あれ？ 二人とも上げたらどうなるの？」

「そりゃ二人とも去勢だろ」

「ひいいいい、やめっ」

「何もしてない……」

「女の子突き飛ばしてあの態度で……何もしてないとはねえ」

「ふざけてるわよ！」

「こいつらいつつもこう！」

「タ〇キン潰しちゃおう！ 去勢したらおとなしくなるんでしょ？」

「な、治るから関係ないって！」

「あ、治るからいいんだって」

「ほんじゃ気軽に潰させてもらいましょうか」

「お、そうだな」

ぞんざいな言葉遣いの子もいるが、周りで盛り上がっているのは女子たちばかりだ。

不良が吊り下げられ、急所を握り潰されだした時点で関係ない男子たちは逃げ出していた。

同じ男として見るに堪えない金責めショーが始まりそうな予感がしたのだ。

ここ、うさぎ県はそういうのが好きなドS女子の割合が世界一多い土地である。そこで暮らす男た

ちが「女が玉責めしだした」というシグナルに対して「即逃亡」を選ぶのは当然の処世術といえるだろう。

群衆となった女たちは口では正義らしきものを唱えている。

しかし実際のところはそれを大義名分にして金的責めがしたいだけのドSであるに過ぎない。

……過ぎないのではないか、と疑うに足る何かを、この県の男たちは幼いころから見せられ続ける。

そのため、こういう状況に置かれると、関係ないならできるだけさっさと逃げるものが大半なのだ。

それは、傍観者としては巻き込まれないいい行動といえる。

しかし皆がそれをしていたら、自分が女たちに狙われる立場になった時、周りに「いや、さすがに玉はかわいそう」という「男」がいない状況を生むともいえる。

まあ傍観者の時に自分が残っても、自分が当事者の時に同じような人間がいるとは限らないとは言えるが。

ともかく、股間を押さえていた二人の不良が立たされる。

「おらっ、おとなしくしなさい！」

「二人しかいないの？」

「見物人でもいたら「仲間だと誤認した」って**設定で**タマタマ確保できるのにね」

「それ口に出しちゃダメな奴だから」

「設定で、とか言っちゃダメ。あくまでもマジで「誤認」したという歴史認識で押し通さない」と

「あは、だよねえ」

逃げ出した男子たちが正しいことを証明するような発言をする一部少女たち。

「っていうか、玉やられた男ってかわいいよね」

「そうそう！ いっつも威張ってるくせに、ここやられたら「ごおおおお！」だもんねえ」

「まあ「かわいい」というより「受ける」んですけど」

和気あいあい。

普段はスクールカーストで分かれて争い、同じカースト内でもマウントを取り合って万人の万人に対する闘争を続けている少女らが、**睾丸という生贄**を前にして同じく楽しそうにしていた。

玉を握りつつ、微笑む森宮。

——これだよ、この雰囲気！ やっぱり女同士、争ってちゃだめだよな。それじゃクソオスどもの思うつぼ。女は団結して、クソオスに対抗しないと。女が団結して、キ〇タマ集中的に狙っていけばこんな連中この通りイチコロなんだから。

男嫌いで通っている少女。子供のころ男子にいじめられた経験がある。

もともと、困っている人間を助けたいと思う優しい人間でもあった。

いじめ経験ともともとの性質、そして圧倒的なフィジカルが合わさり、森宮十志子は「いじめやるような奴はとりあえず金潰し。不良とかもどうせいじめ肯定してるんだろうから機会を狙って玉潰し」というような行動パターンを持つようになった。

ともかく、動けずにいた不良二人が羽交い絞めにされ、ボコボコと股間を殴られだす。

殴っている少女らは遊び半分である。今のところ、軽く冗談半分で殴っている。

「おぐおおおおおおおおお！」

「はぐっ、ひぎいいいいあああああ！」

「ぎゃははははははははは！ こいつら超大げさ！」

「そんなに痛いわけねーだろ！ 肩叩きだぞ！」

「そらそら金叩き一、痛い？ 痛い？ ほらほら、キーン、キーン、きー……っと、寸止め一、っと見せかけてやっぱりキーン！」

「あいああああああっ！」

「やめてくださいいいいいい！」

「ぎゃははは！ そんなに痛いんだ？」

「まあ痛かろうが何だろうが、お仕置きなんだから潰れるまで殴り続けるんだけどねー」

ポコポコ、軽く叩きまくる少女たち。

本当に、軽く叩いてる。手加減している。

それでも、のたうち回り、涎と唾を飛ばす不良二人。

笑い転げる少女たち。

「こんな軽くなのにこのダメージって！」

「ダッセーわこいつら！」

「男に生まれたことを後悔しな！」

「あー、女の子でよかったわー。金ちゃんぶら下げてたら肩叩きパンチでこのざまだもんね」

「助けて、助けて！」

「おねがiiiiii！」

森宮に握られている二人。

まだ握り潰されていない。

それどころか、副睾丸責めも休んでいた。

休むというか、森宮が他の女たちの玉責めを楽しむために手を緩めていたのだ。

だから助けを懇願もできる。

「助けてほしいか？」

「助けて、俺だけでも！」

「あ、こんなやつ助けちゃダメ！ 俺だけ助けて！ こいつは去勢しちゃおう！」

「おまええええ！」

「こいつ、前にレ○ブしてた！」

「嘘だあああ！ こいつも一緒にやりました、ケツに入れて啜えさせました。おぎょっ！」

「いぎっ！」

「レイパーかよ、加減して損したぜ」

あっさりと、四つの肉玉を手の中で破裂させる森宮。

グニグニと、両手を強く握り締める。不良たちの股間の肉を手の中で磨り潰す。

汗を噴き出し、白目を剥く二人。ピン、と両手足を気を付けの姿勢で伸ばす。

パンツの中では、一物から赤と白の液体が流れ出ている。

一人は包茎、一人は剥けていたが、縮み上がって包茎状態、戻る程度のギリギリの剥けというわけだ。

皮に拡散された液体がパンツに生暖かく広がる。

一瞬あと、泡を吹き、崩れる二人。

見下ろす森宮。

「ふん、クソオス終了」

頬を緩め、パシ、とスカートの前を叩く。

——あたしはそんな目に合わないぞ。女の子様だからな。ああ、優越感……玉潰したこの瞬間の超上から視線ときたら……濡れるんだよ。

じつとりと、処女穴に蜜が滲んでいた。

が、男と違って興奮していても全く周囲に気づかせずにいられるのが女だ。

さっさと歩きだす。

「そっちの二人も去勢しちまおう」

「や、やだっ！」

「やだ、じゃねえ！ レ〇ブ魔どもが！」

「俺はやってません！ 信じて！ っていうか俺はゴムつけたし！」

「お、俺もやってない！ 啜えさせただけ！ 信じて！」

するすると自白していく不良二人。

周囲の女子たちの目が険しくなる。

「あーあ、何こいつら」

「楽しい玉責めが台無しだよ」

「これは本当にお仕置きで玉潰しに移行だね」

「まあやることは同じなわけですが……遠慮なくタマタマ潰せて……むしろ余計楽しいか？」

「ぎゃははは、ほんじゃキャン玉潰しましょうねー」

「いやー、レイプ魔とわかれば遠慮なく睾丸破壊できるね」

「楽しい……っていうのは被害者の子に不謹慎だけど」

「敵討ち敵討ち」

「ひiiiiiii！」

「その前にチ〇ポ見てやろう」

「やだ！」

「やだ、じゃねーって言ってんだろが！ お前らに拒否権があると思ってんの？ ねーんだよ！」

「脱がせろ脱がせろ」

「ご自慢のおチ〇ポ様登場ー」

羽交い絞めでは、防ぐなど不可能。それでも必死で足を締める。

と、拳が飛んでくる。股間に。

先ほどまでと違い、かなり本気のパンチ。

「あぎiiiiiii！」

「足開けこら！」

「キ〇タマ殴り潰すぞ！」

「わ、わかりましたああ！」

足を開く不良たち。ズボンを下される。顔を赤らめ、目を輝かせる少女たち。

「うわっ、こいつちいさ！」

「うちの弟のより小さいよ！」

「へえ、何歳？」

「先月生まれた」

「ぎゃははははははは！ もうこんな粗チン取ったほうがいいって！」

「こっちもクソチ○ポ！」

「うわ、こっちも！」

森宮にあっさり握り潰された二人も、再生薬で玉を治され、抑え込まれてズボンを下される。

フルチン四人に群がる若い女たち。

その部分だけを見ればちょっとしたハーレムだが……

引っ張られ、並ばされる四人。股間を指さし、笑い転げる少女たち。

そろいもそろって、四人とも小指のような一物が申し訳程度に毛の中から顔出すだけ。

「おいおい、四人とも極小じゃん。短小同盟か？」

「可哀そうだからチントレしてあげる」

摘まみ、引っ張る女子。

そういうことをするのは非処女っぽいのが、案外そういう問題ではなく、あまり潔癖ではない子が処女云々と関係なく引っ張りに行く。

「ああああああ！ 皮が伸びちゃうううううう！」

「ぎゃははは！ 身が小さすぎて皮しか引っ張れねー！」

「包茎強化という、逆チントレ」

「まあ再生薬で伸びた皮は戻るから平気平気」

「これから絶対何回も玉潰しされるんだから、伸びた皮はその時の再生と一緒に治るから」

「ならどんどん伸ばしちやおう」

並んで、皮をつままれて引っ張られる四人。

悲惨な光景といえた。

「ぎぎれるううううう！」

「それも治るから平気平気」

「痛いんですううううう！」

「それは男の子なんだから我慢でしょう」

「ひぎいいいいい！」

「まあ、チンチ○の皮なんてそうそう千切れないよ。女の子の握力じゃ、切れる前に滑って放しちゃうって」

「だから痛いんですううううう！ はぐっ！」

「だから我慢しろつってんでしょうが。キ○タマ殴るよ？」

「もう殴ってるううううう！」

涙と鼻水を垂れ流す不良。一人が金パンチを食らうと、他のものもついでに殴られる。

狂乱の中、スマホが出てくる。

「写真撮って流そう」

「顔も一緒にね」

「お、大きさじゃない、テクニックだ！」

本人もあまり信じていないのではないかと思える震え声。

いや、もともとは信じていたとしてもここまで笑い転げられればその信念も揺らぐ気もするが。

そんな不良に、指で一物の大きさをこれ見よがしに示す少女。

「こんなチ○ポじゃ信じたくないかもしれないけど、**大きさでしょ**」

「っていうかチンチ○大きいからってテクが身につかないってことはないんだよ？ 同じように上手くなれる」

「でも小さいのは小さいまま」

「これは勝負ありでしょう」

「ひiiiiii」

「はうううう」

「俺のはそんな小さくないいい。彼女も別に小さいって言わないし……初めて見せたとき「嘘でしょ！」って言いつつ**謎の爆笑**をただけで……小さいとは言わなかったから……だから俺のは小さくない！」

「——という夢を見たとき」

「ぎやはははは！ せめて平均あればよかったねえ、……小学生の平均！」

「その短小チ○ポは彼氏としては恥ずかしいレベル。セフレなら許容可能。セックスは無理だけど」

「ゲラゲラゲラ！ それセフレじゃねーじゃん！」



「想像して短小さんたち、公務員になって、結婚したとしよう」

「うわ、**奥さん**かわいそう！」

「娘が生まれて、保育所ぐらいいお風呂に入れて言われるわけよ、同じ学年の〇〇君よりパパのチンチ〇小さい、って」

「うひゃああああこれはもう**ママに転職する**しかない！」

「っていうか、今からさせてやるよ」

「このレイプ魔が！」

少女らが群がり、不良たちの玉を蹴り潰し、電気あんまで踏み潰す。

潰れたらすぐに再生され、延々続く金責めリンチ。

森宮はそれを満足げに見つつ、部活があるからと引き上げる。

体験版終わり

この後も森宮十志子、クソオスの玉を潰しまくります。

男嫌いの彼女にとって、「悪い男」たちは制裁口実で金潰しをさせてくれるいい餌なのでした。

続きは製品版でお楽しみください。